様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ２３０７１

研究課題名（和文）津島佑子の文学における自然・動物の表象についての研究

研究課題名（英文）A Study of the Representation of Nature and Animals in the Literature of Tsushima Yuko

研究代表者
山田　克尚（村上克尚）（Murakami, Katsunao）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：８０７６５５７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、津島佑子の文学における自然・動物の表象に注目し、その発展の形態、ならびにそれを促した戦後日本の時代状況との関係について明らかにすることだった。「伏姫」の分析では、津島の自然・動物観の背景に、当時のフェミニズム主流派からは批判された「エコロジカル・フェミニズム」と共鳴するものがあったことを明らかにできた。「真昼へ」の分析では、長男の死を契機に、アイヌ口承文芸の方法の摂取があり、それは統一的な語り手を瓦解させ、新たに多自然主義的な語りを生み出していることを明らかにできた。これらは、津島文学の主題と技法における特異性を証明するとともに、文学研究の方法論自体に深い内省を迫るものだと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究が明らかにした、津島文学と「エコロジカル・フェミニズム」の共鳴は、当時のフェミニズムが十分に評価できなかったケアに関わる問題を提起する。ケアを母性に還元することなく、自律した主体の概念を問い直す政治的ツールとして鍛え直すことは喫緊の課題であり、本研究は津島文学がそのような議論に資する可能性を持つことを示すことができた。また、統一的な語り手を持たない津島文学に固有の語りは、文学研究におけるナラトロジーの方法の全面的な刷新を促すものであり、この方向に研究を進めていくことで、主体を前提とせずに語りという現象を考察し記述する新たな方法が確立されることが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to focus on the representation of nature and animals in Tsushima Yuko's literature and to clarify the form of its development and its relationship to the postwar Japanese historical situation that prompted it.In my analysis of "Fusehime," I was able to show that Tsushima's view of nature and animals had something in common with "ecological feminism," which was criticized by mainstream feminists at the time. In the analysis of "Mahiru-e," I found that the death of her son triggered the intake of Ainu oral literary methods, which dissolved the unified narrator and created a new multi-naturalistic narrative. These findings prove the uniqueness of Tsushima's literature in terms of subject and technique, and also force us to reflect deeply on the methodology of literary studies itself.

研究分野：人文学

キーワード：津島佑子　エコクリティシズム　動物論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

私は、これまで日本の戦後文学における動物表象についての研究に従事してきた。博士論文「日本戦後文学における動物の表象について――武田泰淳・大江健三郎・小島信夫を対象に」（2016 年に東京大学に提出）においては、武田泰淳、大江健三郎、小島信夫という三名の戦後作家を対象に、日本の戦後文学において、動物の表象がどのように機能しているかについて考察した。その後、この博士論文は、改稿を経て、2017 年 9 月に『動物の声、他者の声――日本戦後文学の倫理』（新曜社）として出版することができた。

しかし、上記の研究は、各自の戦争体験と動物表象との関わりに注目したこともあり、研究対象を男性作家に限定せざるを得なかった点に限界があった。この反省に立ち、2017 年度からは、日本学術振興会特別研究員（PD）として、研究課題「戦後女性作家の文学における動物の表象の研究」に取り組んだ。ここでは、倉橋由美子、大庭みな子、金井美恵子、津島佑子ら戦後女性作家の作品における動物表象の分析を行なった。

この過程において、私のなかで津島佑子の文学の比重が大きくなってきた。また、津島佑子の作品では、単に動物のみならず、自然環境とのコミュニケーションを視野に入れない限り、その文学的達成を十全に位置づけられないことが分かってもきた。就職に伴い、特別研究員（PD）の研究課題は中途で区切りをつけねばならなかったが、これを機会と捉え、新たに津島佑子の文学に焦点を絞って、その自然・動物の表象の意味について考察したいと考えた。

以上が、本研究の開始当初の背景である。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、津島佑子（1947-2016）の文学作品における自然・動物の表象に注目し、それらの発展の形態、ならびにそれを促した戦後日本の時代状況との関係について明らかにすることである。

津島佑子は、1960 年代後半以降、精力的に創作活動を続けた戦後女性作家である。2016 年の突然の死後、その再評価の機運は急速に高まっている。2017 年には、河出書房新社編『津島佑子――　土地の記憶、いのちの海』（河出書房新社）、井上隆史編『津島佑子の世界』（水声社）、2018 年には、川村湊『津島佑子――光と水は地を覆えり』（インスクリプト）が出版された。また、『津島佑子コレクション』（人文書院）の刊行も開始されている。

現在、注目を集めているのは、主に津島の後期の作品である。台湾の高砂族の蜂起を背景とした『あまりに野蛮な』（2008）、キルギスを中心とした中央アジアの旅行記のかたちをとった『黄金の夢の歌』（2010）、キリシタン弾圧とアイヌを関係させつつ、海上を逃れる難民たちの姿を描いた『ジャッカ・ドフニ――海の記憶の物語』（2016）など、世界的な視野から書かれた小説が、従来の日本語文学の枠を超え出る作品として高く評価されている。また、『ヤマネコ・ドーム』（2013）、『半減期を祝って』（2016）など、3・11 の原発事故について取り組んだ作品も、ポスト 3・11 の問題を考える際には、必ずと言ってよいほど言及されている。

しかし、それら後期の達成が、津島の創作においてどのような過程を経て可能になってきたのか、という問題は明らかにされていない。現在注目を集めている津島の後期文学の特徴を、内容面においては、世界史におけるマイノリティたちへの注目、形式面においては、そのマイノリティたちによる口承文芸を摂取した独自の語りの方法という点に見定めると、その起源は、六〇年代後半に、泉靖一、山本祐弘、知里真志保らの人類学の著作に触れて、自分の価値観が入れ替わったという、津島の回想へとたどり着く（津島佑子・山口昌男「流れる言葉、交わる言語」『新潮』、2000/1）。つまり、津島文学の脱西洋中心主義・脱人間中心主義ともいうべき志向は、後期からではなく、初期から通時的に追っていかなければその射程を正しく捉えることはできないのである。

津島の文学では、初期作品から、動物が頻出することはよく知られている（「レクイエム」1969、「壜の中の子ども」1975、『歓びの島』1978）。柳田国男からの影響を受けた「黙市」（1982）においては、森からやってくる猫を父親として迎えるといった独自の家族観が表現され、異類婚姻譚の伝統を下敷きにした「伏姫」（1983）においては、人間と動物との性的交わりの意味が探究されている。また、光や水といった、主体を取り巻く自然環境に対する、アニミズム的ともいうべき感性も同様に知られている（『光の領分』1979、『水府』1982）。語りの面では、アイヌのカムイ・ユカラが、あらゆる自然物を「私」という一人称で語らせる形式をもつことに学び、「私」という主語を徹底的に脱構築しようとした『「私」』（1999）のような達成も存在する。

以上のように、自然・動物の表象は、津島の文学における重要なファクターであるとみなせる。本研究は、自然・動物の表象が、津島の文学を初期から後期まで貫くものであることに注目し、その変遷を追うことで、津島の文学の全体像を描出し、津島の文学的営為の歴史的な位置づけを行なおうとしたものである。

## ３．研究の方法

本研究の方法は、１）津島佑子の文学作品における自然・動物表象を抽出する、２）それらに影響を与えていると考えられる時代状況、ならびに他の作家の文学や、他分野における思想などとの間テクスト的な関係を調査する、３）津島の諸作品を時系列で比較し、文学内部でのそれらの表象の変化・発展を跡づける、といったものからなる。

## ４．研究成果

本研究の特に二年目は、コロナウイルス蔓延の状況と、それに対応する学内業務のため、必ずしも計画通りに進めることができなかった。しかし、それでも、本研究を今後さらに発展させるための軸となる論文をいくつか完成できたことは大きな成果だと考えられる。

「動物から世界へ――津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴」（『言語社会』14号、2020 年 3 月）では、長男の死を契機に、アイヌ口承文芸の方法の摂取があり、それは統一的な語り手を瓦解させ、新たに多自然主義的な語りを生み出していることを明らかにできた。この津島文学に固有の語りは、文学研究におけるナラトロジーの方法の全面的な刷新を促すものであり、この方向に研究を進めていくことで、主体を前提とせずに語りという現象を考察し、記述する新たな方法が確立されることが期待される。

「ポストリブの時代における「母性」の問題――津島佑子「伏姫」を手がかりに」（論集『対抗文化史』大阪大学出版会、2021 年刊行予定）では、津島の自然・動物観の背景に、当時のフェミニズム主流派からは批判された「エコロジカル・フェミニズム」と共鳴するものがあったことを明らかにできた。この共鳴は、当時のフェミニズムが十分に評価できなかったケアに関わる問題を提起する。ケアを母性に還元することなく、自律した主体概念を問い直す政治的ツールとして鍛え直すことは喫緊の課題であり、本研究は津島文学がそのような議論に資する可能性を持つことを示すことができた。

以上のように、論文の数としては決して多いとは言えないものの、津島文学の主題と技法における固有性は十分に提示することができた。また、この津島文学の固有性に対応し得るような文学研究の方法を新たに発明するという課題も見えてきた。以後も継続的に、津島文学の研究には取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>村上克尚 | ４．巻<br>14 |
| ２．論文標題<br>動物から世界へ――津島佑子「真昼へ」におけるアイヌの自然観との共鳴 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>言語社会 | ６．最初と最後の頁<br>112-128 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>村上克尚 | ４．巻<br>74（3） |
| ２．論文標題<br>踏み外した海にたゆたう――古川真人「ラッコの家」論 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>文學界 | ６．最初と最後の頁<br>197-209 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>村上克尚 | ４．巻<br>18 |
| ２．論文標題<br>交わらなかった議論――吉本隆明『「反核」異論』をめぐって | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>原爆文学研究 | ６．最初と最後の頁<br>116-127 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>村上克尚 |
| ２．発表標題<br>人間を問い直す ――日本の戦後文学と震災後文学における動物の主題を繋いで |
| ３．学会等名<br>INU International Conference、韓国・仁川大学校（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>江口真規，佐々木ボグナ，西原志保，村上克尚 |
| ２．発表標題<br>日本文学と動物――ジェンダー・肉食・震災 |
| ３．学会等名<br>三学会合同国際研究集会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>高木信，武内佳代，堀井一摩，村上克尚 |
| ２．発表標題<br>憑在論で読み直す〈語り〉――亡霊的なもの（たち）との邂逅 |
| ３．学会等名<br>第7回 東アジアと同時代日本語文学フォーラム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>紅野　謙介、内藤　千珠子、成田　龍一 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>平凡社 | ５．総ページ数<br>472 |
| ３．書名<br>〈戦後文学〉の現在形 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>木村　朗子、アンヌ・バヤール＝坂井 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>明石書店 | ５．総ページ数<br>520 |
| ３．書名<br>世界文学としての〈震災後文学〉 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|